



1) ゲイビマンの前身「オジレンジャー」／2) ゲイビレッドのマスク作成の過程。油粘土で作った立体モデル／3) 立体モデルからFRP製マスクを作るための型取り／4) 塗装を施し、完成したマスク／5) レッド以外のマスクやボディスーツなどは仲間と協力して製作／6) ショーの前に集まって打ち合わせをするスタッフ／7) 被災地支援で陸前高田市を訪れたゲイビマン。写真は公演前のリハーサルの様子／8) ヒーローの日常。タイヤの空気圧をチェックする菊地さん



6



8



7

始まりは子供たちへのアプローチ やがてそれは自分たちの夢に

ゲイビマンの前身は「オジレンジャー」。05年長坂保育園の運動会にローカルヒーローとして現れた。

きっかけは、夕涼み会に参加した父親の一人が全身タイツで踊り出したこと。奇抜なスタイルとパフォーマンスに「これは面白い。改良すればヒーローになれる」と直感した菊地さん。父親たちを誘ってオジレンジャーを結成。同年の運動会で初めてショーを行った。

戦うだけでなく、ダンスも踊る。まるでテレビから飛び出してきたかのような戦隊ヒーローの圧倒的なパフォーマンスに園児は心を奪われた。噂を聞き付けた他の保育園からもショーの依頼が舞い込んできた。やがて子供は卒園を迎えるが、父親たちは新たな活躍の場を求めようになった。

「わが子だけでなく、地域の子供たちみんなに夢を与えたい」。菊

地さんも仲間たちも、思いは一緒だった。「オジレンジャーではなく、本当のローカルヒーローになろう」。

こうして08年1月、ニューヒーローのデザインに取り掛かる。栃木県のデザイナーに依頼。送られてきたデザイン画を元に油粘土で立体モデルを作った。「無我夢中だった。毎日メールで交信しながらアドバイスしてもらい、何度も試作を繰り返した。マスクが完成したのは3月。寝る間を惜しんで没頭したね」と菊地さんは振り返る。

仲間たちはマスクの出来映えに驚いた。ヒーローを演じたい気持ちは一気に加速する。仲間の一人が「名勝^{なかつぶし}鼻溪の名にちなんだヒーローにしよう」と提案。「ゲイビマン」が誕生した瞬間だった。

本格的な活動を行うために「ゲイビマンプロジェクト委員会」を

立ち上げた。早速、ボディスーツやブーツなど、コスチュームの製作に取り掛かった。仕事の合間や夜間など、限られた時間に作業する。全て自分たちの手作りで衣装を完成させた。

同年11月、六魂戦隊ゲイビマンは初舞台を迎えた。以来、ショーを重ねるたびに知名度は高まった。東山町だけでなく市内外のイベントにも参加するようになった。公演回数は100回を超え、全国から注目されるヒーローになった。

人気を博しても、有名になっても、活動範囲が広がっても、変わらないものがある。子供目線だ。「子供たちを喜ばせたい」、その姿勢はデビューから一貫している。

「俺たちは、子供たちから生まれたヒーローだからね。菊地さんの顔が父親に戻った。

SCENE 2

ヒーローはこうして生まれた

誕生秘話

始まりは、一人の父親のパフォーマンス。
その夢に共感し、立ち上がった男たち。
思いは、夢をつなぎ、仲間をつなぎ、
コミュニティーをつないだ。

